

2024年8月25日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教7「わたしに従いなさい」

創世記28：10～12、ヨハネ1：43～51

ヨハネ福音書が伝える弟子の召命は、誰かを介する仕方で行われるのが興味深いところです。イエスさまが直接一人一人に声をかけて、一本釣りのように弟子にしていってというよりも、誰かが誰かをイエスさまのところに連れて来る。35節から続くこの一連の弟子の召命の記事は、そのようにして仲間が仲間を呼び、やがて12人の弟子の集団が形成されていったと想像することも許されると思います。

フィリポは、ナタナエルに「わたしたちは、モーセが律法に記し、預言者たちも書いている方に出会った」（45節）と言います。「律法」「預言者」は、旧約聖書のことです。つまり旧約の時代から待望されたメシア、救い主に会った。しかも、そのお方は「ナザレの人で、ヨセフの子イエスだ」そうフィリポはナタナエルに言いました。ところが、そのように熱く語るフィリポに対して、ナタナエルは冷ややかな態度を見せています。「ナザレから何か良いものが出るだろうか」（46節）この言葉の背景には、言わば土地に対する偏見、差別意識のようなものがあります。ちなみに今日のところには地名が幾つか出て来ます。「ガリラヤ」（43節）「ベトサイダ」（44節）「ナザレ」（46節）、またこの後の第2章には「カナ」が出てきますが、これらの地域はいずれもガリラヤの地方で、ユダヤ人からすると僻地、辺境の地と言われるような土地です。そのようなところからメシアが出るはずがない。そのような差別意識が醸成されていたのでしょう。わたしたちもこういう差別意識と決して無関係ではありません。やれどこの生まれで、どこの学校に行っている。それで人を見ることがあります。

何を隠そうナタナエル自身が、ガリラヤのカナの出身であると福音書に書いてあります（21：2）。こんな田舎のガリラヤからメシアが出るはずがない。ナタナエル自身もそういう考えから自由ではありませんでした。ガリラヤ出身というだけで、それが彼自身のコンプレックスとなり、諦めにも似た感情に支配されていたのではないかと。わたしたちもそういうコンプレックスを持つかもしれません。最近「親ガチャ」と言って、生まれや育った環境によってまるで人生が決まってしまうかのように考え、初めから諦めてしまう、卑屈になる子どもたちも多いと聞きます。

そのようなナタナエルにフィリポは声をかけました。「来て、見なさい」この言葉は39節でイエスさまが言われた言葉と同じ言葉です。これは「百聞は一見に如かず」というようなことでしょう。とにかく一回来てごらん。まずはイエスさまに会ってごらん。わたしたちも、いくらキリスト教について言葉を重ねて説明したとしても、かえって理屈っぽくなり、胡散臭くなる場合があります。まずは礼拝に来て、これを体験してほしい。礼拝は、イエスさまと出会う場所です。「まことに神さまがおられる」（Iコリント14：25）そういう体験が起こる。人間の言葉、理屈、論理ではなく、納得できるとかできないではない。やはり出会いなのです。「来て、見なさい」（46節）いみじくもフィリポはイエスさまと同じ言葉でナタナエルを導きます。フィリポを通してイエスさまが働かれる。人を介する仕方です。弟子を集めるというのは、そのように神さまは欠けのあるわたしたちを用いられるということではないのでしょうか。「キリストの香り」を放つような存在になるのです。

さてナタナエルは、フィリポに促されてイエスさまのところに行きました。二人は初対面でした。でもイエスさまは彼を見るなり「見なさい。まことのイスラエル人だ。この人には偽りが無い」（47節）と言われました。「まことのイスラエル人」とはどういう意味でしょうか。多くの学者はここで「ユダヤ人」とは言わず「イスラエル人」と言われていることに注目しています。これは単に民族というよりも、宗教的な意味合いが強い。「イスラエル」は、今はあまり良いイメージではないかもしれませんが、聖書において、イスラエルという言葉が持つ響は特別なものがあります。それは神さまに選ばれた神の民としてのイスラエルであります。アブラハム、イサク、ヤコブと続く神の民の系譜です。イエスさまは、ナタナエルに向かって「あなたはイスラエル、正真正銘の神の民だ、神の子だ」と言われたのです。ナタナエルは、ガリラヤのカナの出身だと申しました。そのことで彼自身もコンプレックスを抱いていた。ですからこのイエスさまの言葉はナタナエルにとって大きな喜びだったに違いありません。自分には光は当たらない。誰も認めてくれない、そう思い込んでいたナタナエルにイエスさまは光を当てました。

ナタナエルは「どうしてわたしを知っておられるのですか」と言います。するとイエスさまは「わたしは、あなたがフィリポから話しかけられる前に、いちじくの木の下にいたのを見た」（48節）と言われました。フィリポより先にわたしはあなたを知っているということです。フィリポよりも前に、あなたがわたしと出会う前から、もうわたしはあなたを知っている。あなたを認めている。「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」（15：16）の御言葉を思い出します。誰かに認められることは嬉しいことです。他でもないイエスさまがあなたを知っている。あなたを認めています。

イエスさまに出会ったナタナエルは「あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です」と言いました。これは信仰告白です。ナタナエルは信仰告白へと導かれました。さらにイエスさまは言われます。「もっと偉大なことをあなたは見ることになる」（50節）「天が開け、神の天使たちが人の子の上に昇り降りするのを、あなたがたは見る」（51節）これはイエスさまの十字架とよみがえりの出来事を目の当たりにするということでしょう。よみがえりのイエスさまが、弟子たちに現れた時にナタナエルもその場にいました。偉大な神さまの救いの目撃者となりました。そしてこの救いを伝える器とされていったのです。わたしたちもそのようにイエスさまによって召されています。

天の父よ。あなたの光のもとに招かれたわたしたちを、どうかあなたの救いを伝える器としてください。もちろんそのふさわしさはありません。でもだからこそ、このようなわたしたちを用いてくださる。弱さをこそ用いてくださいます。どうかその恵みを証しすることができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。